

多様性を抱きしめること

大 田 詠 子

「私って変わっている」「みんなにできることが私にはできない」「周囲が楽しんでいるとき、ふと浮き上がって冷めてしまう自分がある」「私が存在している意味って何だろう」誰もが一度は悩むこととは思いつつ、それでもウジウジと実存について悩み続けてしまう。

このような私の悩みを笑い飛ばし、生きる意味を見つける助けをしてくれたのは、強烈な個性を持つ友人たちだった。大学に入って早々、私はセクシュアル・マイノリティ、障がい者、あるいは宗教・民族・国籍などに多様な背景を持つ友人に取り囲まれることになった。それぞれの悩みや社会背景、生きにくさなどをぶつけ合い、逆境を笑い飛ばしながら強く生きる術をシェアするうちに、それまで単一な壁にしか見えなかった周囲も、様々な色で彩られていることを知り、さらなる多様性を探し求めるように自分を変えられていった。そして、まだまだ学院が、マイノリティにとって学びにくい(あるいは働きのにくい)状態であることを彼らから聞き、このような状況を学院の中から世界にベクトルを向けて変えていきたいと思い、職員になった。

しかし、管理者側の立場に立つと手のひらを返したように、多様性が、なんと効率性を阻害するものかと思うものだ。例外がないと、楽ができるのだ。個々の都合に配慮を重ねることは<思い>がなければ本質的に「面倒くさい」ことであり、コストがかかることだ。最小のコストで最大の効果を上げるためにマジョリティを対象に仕事をする、それが私たちの社会の持つ大きな流れであると実感した。学校という比較的効率を追い求めることが少ない職場においてさえ私が感じているのだから、マイノリティにとっての生きやすさは一般社会ではたやすく達成できるものではないと思う。

マジョリティ向けの社会を楽をしながら作っている限り、私たちが当たり前のように使っている「差別をしない」という言葉は、無力だ。多様な背景を持つ友人たちと対話をし続け、自らの立ち位置を認識し、他者との関わりについて悩み続けることでしか、多様性を抱きしめる社会は作ることはできない。多様性を抱きしめる社会とは、自分をきちんと愛せる社会で、すべての人にとって生きやすい社会だ。対話し続けることをいとわず、初心を忘れずに過ごしたいものである。

(神戸三田キャンパス事務室職員)